

犬島アートプロジェクト「精錬所」

正会員 三分一 博 志 君

宝伝から小さな定期船で犬島に到着すると、黒い板張りのチケットセンターが訪問客を迎える。ここから主題の精錬所に向かって南に 200m 歩を進めると、黒いカラミ煉瓦の固まりが目に入ってくる。このレンガ壁跡は施設へのアプローチとして強いインパクトを感じるが、よく見ると赤みや茶が混じった味わい深い色合いである。犬島アートプロジェクトのベースは、大阪城の築城にも貢献した良質な薄いベージュ色の花崗岩と現しの木構造、ガラスなどで構成され、主張しすぎずに環境と一体となった佇まいが印象的である。カラミ煉瓦とこの花崗岩のコントラストも心地よく、地産の材料を丹念に選定・使用したこの作品は、時間経過のなかでさらに魅力を増していくことであろう。花崗岩が自然の力で汚れてくればさらに調和のとれた美しさを得ると期待できる。

施設全体を見渡すと、犬島の壮大な自然のなかで建築家の仕事は控え目のようにも見えるが、発注者の「在るものを生かし、ないものを創る」というメッセージを軸に、伸びやかで明快な T 字型プランで、その構想・夢を体現している。すなわち、メインのエナジーホール、地中熱を利用した冷却ギャラリー、太陽エネルギーを利用した採暖ギャラリー、太陽と煙突を利用した動力ホールなどを地形に合わせて巧みに配し、さらに、バイオ・ジオ・フィルター（水質浄化システム）の循環システム／ディテールを綿密に建築化し、高い技術力をもって、クライアントの要望に見事に応えている。自然光の溢れる明るいホール、鉄板と鏡の暗闇坂、そして計算された暖気・冷気の流れなど、自然／建築／ランドスケープを通じて、訪れた多くの人々に循環型社会形成の摂理と必要性を体感させることだろう。瀬戸内の大自然のなかで高齢化した過疎の典型であった犬島を、発注者とともにここまで再生させた建築家の力量を高く評価したい。自己完結型の「アートプロジェクト」も多く見られるなかで、居住者にプロジェクトへの参加を促し活力を与え、訪問者にアートの楽しさと建築的科学的刺激を与えている。設計者の一連の環境建築が結実した本作品は、今後の発展も大いに期待され、21 世紀の建築の一つの方向性を示唆するものである。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。